報　告

# 望まない妊娠をした女性の妊娠肯定への影響因子

Influencing factors to accept pregnancy in a woman who unintended pregnancy

三好　理恵

Rie Miyoshi

キーワード：望まない妊娠，妊娠の受容，母性意識，夫の存在
Key words：unintended pregnancy, pregnancy acceptance, maternal awareness, the husband's existence

## 要　旨

「子どもはあまり欲しくない」と思っていた女性が妊娠し，出産することになった．そこで，こうしたあまり妊娠を強く望んでいない女性の妊娠期間中の出産・育児に関する心理はどのような変化をするか知るために，妊娠初期から分娩後までの心理過程に焦点を当てて情報収集し，妊娠初期２回，妊娠中期１回，妊娠末期２回，出産後１回の計６回面接し，心理過程について分析した．その結果，「妊娠を望んでいないあるいは妊娠したことにまだ戸惑っている」と思われる場面は妊娠初期に５場面あった．そして「妊娠を受けとめている」と思われる場面は９場面あり，それらは①夫の声かけなどの行動によるもの，②胎児の存在の認知，③妊娠高血圧症候群と診断されたときの３つに分類できた．「望まない妊娠」といいながらも，夫の妊娠や胎児に対する肯定的な反応，胎動など胎児の存在を実感するなどにより妊娠の受容・母性意識が高まっていくことが明らかになった．

## Ⅰ．はじめに

親などの保護者が子どもを虐待するというニュースは，テレビや新聞等でも大きく報道されており，現代社会の問題の一つとして考えられている．その一方で女性の社会進出に伴って，合計特殊出生率は 2006 年では 1.32 と，少子化をむかえ，女性の出産・育児をどう支えていくかということはこれからの課題とされているところである．

「子どもはあまりほしくない」と思っていた女性が，結婚約４ヶ月後に妊娠していることがわかった．本人は今妊娠したことにかなりショックを受けていたようだが，産む決心をし，無事出産することができたその経過において妊娠を肯定していける様々な場面と人との関わりがあった．

そこでこの事例を通して，心からは望んでいない妊娠をした女性の妊娠初期から妊娠末期までの聞き取り調査により，妊娠・胎児・出産に関する思いを表す妊婦の思いを抽出し，それを通して心理の変化の様相を分析した．

その結果，母親役割取得および胎児への愛着の状況を知ることができ，望んでいない妊娠であったとしても，妊娠が進むにつれて妊婦自身が妊娠を肯定する因子を明らかにすることができた．そして望まない妊娠をした妊婦が「望まない妊娠」という思いから解放され，母親になることに対して自信がもてるようになるための看護職としての支援のあり方を考えることができたので報告する．

受付日：2007 年 10 月 1 日　　受理日：2007 年 12 月 3 日
埼玉医科大学保健医療学部看護学科

## Ⅱ．研究の目的

望んでいない妊娠をした女性の妊娠期間中の出産・育児に関する言動から妊娠に対する心理過程の変化を分析し，妊娠肯定への影響因子を明らかにする．

## Ⅲ．研究方法

### 1．研究方法および対象

対象は初回妊娠，初産婦で妊娠を望んでいなかった女性 1 事例．妊娠初期から分娩後までの心理過程について半構成的面接法による聞き取り調査を行った．1 回の面接時間は約 1 時間～ 1 時間 30 分とした．面接の際にはメモをとり，面接終了後直ちに記録をした．その記録内容を本人に確認し，分析を行った．

### 2．研究期間

平成 13 年 3 月～ 11 月上旬，妊娠 13 週から分娩後まで計 6 回面接を行った．

### 3．データの分析方法

面接による情報から妊婦の妊娠・出産に関する言動を，母性意識の視点でその内容を分析・解釈した．

### 4．倫理的配慮

研究対象者には，研究目的や方法，研究参加・中途辞退の自由，プライバシーの保護，研究結果の公表について説明し，口頭にて同意を得た．

## Ⅳ．妊娠の経過と妊婦の思い

### 1．事例紹介

25 歳　女性　現在夫と二人暮らしである．

### 2．面接の内容と分析

面接は，妊婦の心理に影響すると考えられる妊娠経過（妊娠初期のつわりがある時期，胎動を感じる時期，妊娠中期から妊娠末期にかけて体調が安定してくる時期，出産前）を想定し，出産後を含めて 6 回となった．

**表 1　面接の内容と分析**

| | | 面接時の妊婦の思い | その分析 |
|---|---|---|---|
| 妊娠週数 4 ～ 5 週 | 妊娠ではないかと気づいた時期の思い | 「生理が遅れていることには気づいていたが、まさかという程度だった。タバコもいつもどおり吸っていたし、会社の飲み会にも参加していた。会社の先輩に話したところ『妊娠かどうかはっきりするまでタバコもお酒もやめたほうがいい』といわれ、また夫にも同じようなことを言われ、お酒もタバコもやめることにした。」と話した。 | 夫や会社の先輩に生理が遅れていることを話していることから「まさか」と言っているが、「妊娠しているのかもしれない」と予測していたように思われる。お酒やタバコをやめたほうがよいという意見を素直に聞きいれている。このことは妊娠しているかどうかわからない時点で、妊娠は望まないとしながら胎児への気遣いがみられると判断できる。 |
| 妊娠週数 13 週 | 妊娠が確定した初診時の思い | 初診時、「妊娠検査薬では陽性と出たが、翌日病院に行くまでは間違いであってほしいという気持ちだった。病院で妊娠していることがはっきりしたときは『やっぱりできてたか』と言葉では言い表せない気持ちだった」と話す。なぜ産むことにしたのかという問いに対して「なぜといわれても…。前から夫は子供をほしがっていたことを考えて、できたならしょうがないと思い、産もうと思った。」と迷いながら言った。そして「もし中絶しようと思っていたら妊娠検査薬の結果を夫に見せない。病院でも中絶するかどうかなんて一言も聞かれなかった」と答えた。 | 医師の診察を受けるにあたって妊娠が間違いであってほしいと、この時点ではまだ妊娠を望む気持ちが少ないということがわかる。そして、産むか産まないかを迷いながら決定している。妊婦自身は心から妊娠を喜べていないが、産むと決めた理由は夫や周りの人々が喜んでいることだった考えられる。病院での対応も結婚している妊婦に「中絶」を勧めないだろうから、たとえ望んでいたとしても「中絶」という選択をしにくい状況であり、医療関係者の妊娠に対する反応も出産を決めたことと関係していると考えられる。 |
| 妊娠週数 13 週 | つわりの時期に初めてエコーで胎児を見た時の思い | つわりが出現している時、次のように語っている。「3 月中旬頃つわりがひどいことが多く、そのうえ禁酒・禁煙や仕事のストレスもたまっていたがそれを発散する方法がない。夫は会社のクラブ活動などで帰りが遅くなり、そのことに対して夫だけ遊んでばかりとイライラすることが多かった。しかし 3/30(8w3d) の検診時に胎児をエコーで見せてもらったときに動いているのを見て『おお！』と感動した。今までは小さすぎて、特に何も思わなかった。母子手帳をもらいに行ったが『自分で書くのか、面倒くさいな』と思っただけだった。」と話した。母子手帳を見せてもらい何も書かれていないので、何も書いてないことを聞くと「面倒で。それどころじゃなかったし…」、「4 月中旬ころはさらにつわりがひどくなり、毎日のように怒っていた。妊娠していなければ自分も遊べるし、夫だけ遊んでいるなど思わなかっただろうけど。」と話した。 | つわりといった身体的な辛さが心理的にもかなり影響しているようである。妊娠前から夫はクラブ活動のため帰りが遅かったはずだが、それをこの時期に気にしているということは「もっと自分を気遣ってほしい、関心をもってほしい」というつわり時の妊婦の心理の表れなのか。夫と二人暮らしということもあり、この妊婦にとって最も重要な人は夫だと判断できる。またエコーで胎児が動くのを見て今までにない感情を持ったようで、実際に胎児に関する何かを目で見たり、聞いたり、感じたりすることによって妊婦の心理が動いているということがわかった。母子手帳には何も書かれていなかったが、これは余裕がなかったのであって、決して妊娠に対しての認識や自覚がないとは言い切れないと考えた。つわりのために日々の生活だけで精一杯だったのだろう。つわり時には妊娠していること自体より妊娠による苦痛のほうに目を向けられている。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 妊娠週数 14 週 | 実家での実母との対話 | 実母にエコー写真を見せながら約 8,2cm に成長した胎児を見て「これくらいで産まれてきてくれたらいいのに」と言う。それでは育たないというと、「 保育器がある 」と真顔で答えていた。また「 つわりが辛い 」といっていた妊婦に対して、実母が「 つわりは気の持ちよう、だらだらしていてはいけない 」と言った。妊婦は無表情にかるくうなずくだけだった。 | 「約 8,2cm で産まれてきてくれたら」という妊婦の言葉は、分娩の痛みに対する怖さの表れなのか、おなかが大きくなるのが嫌なのか、妊娠経過が長くなることへの負担感などそれらをすべて含んだものと考えられる。また小さく産まれてきてほしいという考え方は、「保育器がある」という言葉に表されるように、たとえ小さく産まれても安心という漠然とした判断がみられる。小さく産まれたらかわいそうなどのイメージはないようだが、医療に対する知識などが不十分なための言葉であり、「産む」と決めたゆえの言葉だと考える。またつわり時の実母の注意に対してあまり反応が見られないのは、言われたことは理解できるが、納得できずにいるための反応であると考えられる。 |
| 妊娠週数 22 週 | 胎動を初覚した時の思い | 初めて胎動を感じたのは 5/30(17w4d) だった。「最初はおなかがゴロゴロしているような感じでおなかの調子が悪いのかなと思っていた。でも何か違うと思って、『これが胎動かも』と思い、夫におなかを見てもらうと『ピクッと動いた』と言った。そのときに私も動く感じがしたから、『これが胎動かー』と感動した。本当にいるんだという感じがした。私は話しかけたりしていないが、夫は毎晩『R くん』『起きてるか』『おやすみ』などと話しかけている。おなかをポンポンとやさしくたたいてみるとよく動く。何かクラシックとか聞くといいのかな」といった。話しているときも以前に比べ、楽しそうに笑顔で話している。 | 今までエコーで見ることで胎児がいるということを感じてきたが、胎動を感じたことでより赤ちゃんがいる、すなわち母親であるということを意識するようになったのは確かである。妊婦自身は話しかけたりはしていないといっているが、言葉ではなくおなかをたたいたりしていることも一つのコミュニケーションをとる姿勢だと考えられる。またすでに名前を呼んでいることからも赤ちゃんの受け入れができていると思われる。この結果は胎動が実感できたということのほかにつわりがなくなったことや、妊娠経過の中で少しずつ母性意識が育てられてきていると考えられる。また夫のわが子に対する態度を楽しそうに話していることから、夫がわが子の出生を喜ぶ姿が妊婦の思いに影響を与えていると考えられる。 |
| 妊娠週数 22 週 | 性別がわかったときの思い | 性別は自分から診察時に聞いている。性別を早く聞いたのはなぜかと聞いたところ、「名前を付けたいし、準備とかがあるので知りたかった。別にどちらでもよかったがあえていうなら女の子がよかった。男の子でがっかりしたわけではないが、とてもうれしいわけでもない。男の子は家の手伝いとかしないだろうし、一緒に買い物にも行けないから。夫は『キャッチボールができる』と喜んでいる」と話した。R という名前の理由を聞くと、「かっこいい名前で強そうな感じがいいと思ったから」といい、夫と二人で考えたと話す。 | 性別を知りたかった理由は名前のことやいろいろな準備が必要だからといっていることは、出産・育児にむけての環境を整えようというのは母親としての意識が確実になっているという表れであると考えられる。また「赤ちゃん」という一般的な呼び方ではなく、名前をすでに付けて呼んでいることは自分の子どもをすでに家族として認識しているからと考えてよいだろう。この場面で子どもが産まれた後の発言は初めて出てきた。これは少しずつわが子との 3 人の生活を考えはじめているといえる。 |
| 妊娠週数 30 週 | 仕事と育児の両立についての思い | 「もともと専業主婦になるつもりはなかった。一番の理由はこの仕事にやりがいを感じているから。自分の母も二人の子どもを育てながら仕事を続けていたし、その影響もあると思う。会社での人間関係もうまくいっているし、楽しい」と話す。仕事を続けながら育児をすることに対して不安はないかと聞くと、「一番心配なのは、子どもの具合が悪いときに仕事を休めるかどうか。私の仕事は他の人に頼めないから急に休むことができないし、夫に休んでとも言いにくいし…。今まで残業なども何も気にすることなくやっていたが、子どもがいると『早く帰らないと』と思えてきたりするのではないかな。通勤時間も長いから子どもに何かあってもすぐに帰れないことかな。」と答えた。仕事を続けることに対する夫の反応はどうなのかと聞くと、「もともと夫は『自分ひとりで家族を養ってやろう』という思いはなく、『二人で家事や育児は協力して行って、二人で働こう』という考え方だから賛成してくれている。今でも残業で遅くなってもご飯を作って待っていてくれるくらいだし、普段も分担してやっている。」と話した。 | この妊婦は仕事に対してやる気や責任感を持ち、また母親として一人の女性としての意識も高く、また家庭と外との人間関係も重要としていると考えられる。育児だけではなく、社会とのつながりをもち、一人の人間として自分も成長していきたいと考えた生き方を望んでいると思われる。しかし仕事を続けたいと強く希望しながら、働く母親として仕事と育児が両立できるのかという不安が見られる。仕事にはやりがいを感じているが、子どものことを考えると仕事中心というわけにもいかないと思っている。しかし「子どもはいらなかった」とか「子どものせいで仕事ができない」など否定的な感情はまったくなく、「どうやって両立するか」と前向きに考えている。妊娠初期に出産を迷っていたのも仕事のことが大きく関係している言動があった。またこの妊婦の場合、夫の協力がかなり得られているようである。夫が「育児は母親の仕事」というのではなく、夫婦の役割と考えているのだろう。その点で妊婦自身と考え方が一致していることが妊婦にとって大きな支えになっている。 |
| 妊娠週数 37 週 | 妊娠高血圧症候群と診断された時の思い | 妊娠高血圧症候群の症状があるため、総合病院を紹介され受診した。「自覚症状がないから『嘘！』と思った。他の病院をすすめるのはかなりひどいのかなと思った。妊娠高血圧症候群に関する雑誌を読んだり、インターネットで調べたり、悶々としていたけど『まぁなんとかなるだろう』と思った。今でも妊娠高血圧症候群という自覚はないけど、出産したら治るらしいから早く無事に産まれてきてほしい。まれに後遺症を残す人がいるらしいからそれが心配。あと二人目のときも妊娠高血圧症候群になりやすいらしいからそれも心配。妊娠中の生活を甘くみていたなと思う。先生は『妊娠高血圧症候群は体質もあるから』と言っていたけど、妊娠してないときと同じように生活していたからかなと思う。」と話していた。 | 妊娠高血圧症候群と診断され、信じられない気持ちと不安な気持ちが入り混じった心理がみられる。「 出産したら治る 」と聞いて「 早く無事に産まれてきてほしい 」という言葉は、自分の身体のことだけでなくわが子のことも考えていることであり、妊娠経過の中で母親としての意識が確実に高まってきているということがわかる。妊娠高血圧症候群になったのは自分の生活習慣や妊娠中に何に注意すればいいのかなど妊娠期間中の生活を振り返って反省している。しかし「 何とかなる 」という言葉からも前向きに分娩・育児を考えており、この妊婦は、冷静に自分で自分の生活を振り返り、対処していく能力があるといえる。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 妊娠週数 37 週 | 入院時の思い | 妊娠高血圧症候群にて受診の結果、入院することとなった。「入院は最初はいやだったけど、赤ちゃんと自分のために仕方ないと思った。今となっては入院したほうが血圧も下がって、むくみもひいたし、よかったなって思う。でも好きなものが食べられないのが一番ショックだった。」と話す。 | 入院することを嫌だと思いながらの入院であったが、入院したことによって血圧が正常になったり、むくみがひくなどの効果がでてきたことから「入院してよかった」という気持ちになったようである。このことはつわりのときには自分の身体だけに意識が向いていたのとは異なり、「赤ちゃんと自分のため」という言葉にみられるように自分だけではなく、わが子にも意識が向けられている。ここからも妊娠期間中に確実に母親としての意識、胎児への愛着が高まってきているということがわかる。 |
| 妊娠週数 37 週 | 分娩を直前にしての思い | 出産まで入院することになり、出産について「早く陣痛がきてほしい。誘発剤を使うようなことを先生は言っていたけど、自然な陣痛がきてほしい。あんまり呼吸法とかわからないけど、みんな無事に産まれているから何とかなると思う…。」と話す。呼吸法は練習したりしていないのかときくと「母親学級でやったけど、あんまり覚えていない。」と答えていた。夫の立会い分娩を希望しているかときくと、「夫は立会い分娩を希望しているが、私はどちらでもいい。『いてくれたほうがいいのかな』とは思うけど。」と話してくれた。 | 「早く陣痛がきてほしい」という言葉から分娩に対する恐れよりも早く産まれてほしい、あるいは早く妊娠を終了して子どもに会いたいという気持ちが強いといえるが、「出産すれば妊娠高血圧症候群が治る」という言葉が強く影響し早く産みたいとの思いにさせたと考えられる。胎児を心配する言葉は特にないが、「妊娠高血圧症候群が胎児に悪影響を及ぼさないように」と考えているとも思えるが、妊婦の言葉からはいずれの思いか判断できない。陣痛促進剤を使うことに抵抗を感じているのは、自然な分娩がしたいという希望があると考えられる。夫の立会い分娩についても十分な知識はなくても支えとなっていることがわかる。 |
| 分娩後 3 週 | 分娩を終えて | 出産して 3 週間後に面接し、出産のことを振り返ってもらった。「今思えば初めての出産にしては陣痛から産まれるまでが早かったと思う。どういうふうにいきんでよいのか最初はわからなかった。実際は分娩室に入って約一時間で産まれたが、もっと長く感じられた。やはり痛かったが、呼吸法をもっとしっかり勉強しておけば、もう少し楽だったのでは？と思う。立会い分娩だったが、特に何もしてくれなくても精神的に安心できた。陣痛のときに何もしてくれなかったのは少し不満だが。夫は分娩の一部始終を見ていて、頭が見えたときはさすがに感動して少し涙がでてきたらしい」と話してくれた | 立会い分娩について、分娩前は「どちらでもいい」という考え方だったのが、実際に行われてみて、「精神的に安心できた」と感じている。ここから夫の存在が産婦にとって重要であり、体験を共有できたことはこれからの育児に関係するのではないかと考えられる。ただ「陣痛のときに何もしてくれなかったのは少し不満」という言葉からも「ただいる」ことが支えになることもあるが、それでは不十分と感じる部分もあり、夫への愛着、期待というものがこの産婦の場合高いと思われ、今後の生活にも夫の果たす役割は重要だと考えられる。分娩に対する知識が不十分だったようであるが「陣痛から産まれるまでが早かったと思う」という言葉からも産婦の予想以上にスムーズな分娩であったようである。出産が脅威体験になった場合は次の出産にも大きく影響すると考えられるが、この妊婦は特に出産に対して恐怖などをもったようではなく、むしろ「出産を乗り越えた」という自信がつき、この自信が育児にもつながっていくのではないかと考えられる。 |
| 分娩後 3 週 | 赤ちゃんを初めて見た時の思い | 出産直後に、わが子を見てどう思ったかと聞くと、「妊娠高血圧症候群だったため、無事に五体満足で産まれてくれてホッとした。さすがに感動した。ついさっきまで自分のおなかの中にいたとは信じられなかった。泣けるかなと思っていたが、痛さと息苦しさでそれどころではなかった。出産は神秘的だ！」と答えていた。 | 妊娠から出産という過程を乗り越えて、初めてわが子と対面したときに、「感動した」と話している。これは妊娠期間中に確実に母親としての自覚、わが子への愛着が高まっていくことが、出産時の「感動」につながっていると考えられる。「出産は神秘的だ」という言葉は人間の誕生を実際に体験し、わが子をひとつの命として愛しいという気持ちがその言葉の裏にあるのではないかと考えられる。 |

## V．結果

面接は，妊娠初期 2 回，妊娠中期 1 回，妊娠末期 2 回行った．面接時に「妊娠を望んでいない，あるいは妊娠したことにまだ戸惑っている」と思える場面，および「妊娠を受けとめている」と思える場面を面接時の記録より取り出し，その場面での出来事と妊婦の反応で分類した結果 5 場面が抽出でき，①妊娠を望んでいない気持ちが強く表れている場面 2 件（表 2），②望まない妊娠に戸惑っている場面 3 件（表 3）に分けることができた．「望まない妊娠に戸惑っていると思える」場面は 3 件ともつわりや倦怠感といった身体的苦痛を感じている場面であり，妊娠 6 ～ 14 週までに集中していた．「妊娠を望んでいない気持ちが強く表れていた」のは，初診にて妊娠が確定される以前の 1 件であった．

また「妊娠を受けとめている」と思える場面は，妊婦が胎児を慈しむ言葉，胎児に関心を示す言葉が表出されている場面から 9 場面抽出でき，それらは，①夫の声かけなどの行動による場面 5 件であり，それらは (1) 夫が妊娠や子どもが生まれることを喜んでくれた場面；3 件（表 4），(2) 夫が子育てや家事への協力の意志を示してくれた場面；1 件（表 5），(3) 夫が妊娠している自分の身体について注意を促した場面；1 件（表 6）に分類できた．また②胎児の存在が認知できた場面は 2 件（表 7），③妊娠高血圧症候群と診断された場面は 2 件（表 8）に分類できた．

「妊娠を受けとめている」場面は妊娠初期が 3 件，妊娠中期が 2 件，妊娠末期が 4 件であった．妊娠初期

の 3 件は「夫の声かけなどの行動によるもの」2 件，エコーによる「胎児の存在が認知できた」1 件，妊娠中期では胎動自覚による「胎児の存在の認知」，夫の家事・育児への協力を示す言葉によるものがそれぞれ 1 件，妊娠末期においては，夫の立ち会い分娩を望む言葉，妊娠高血圧症候群の診断時に胎児の安全・無事出産を表す言葉がそれぞれ 2 件として示されていた.

**表 2　妊娠を望んでいない気持ちが強く表れている場面（2 件）**

| 妊娠週数 | 出来事 | 妊婦の反応 |
|---|---|---|
| | 生理が遅れている | 「『まさか』という程度だった」と話す。 |
| 妊娠 4 ～ 5 週 | 病院に行く前日に自分で妊娠検査薬を購入し、陽性と出ていた。病院で妊娠と診断された。 | 「陽性と出ていたが、間違いであってほしいという気持ちだった。病院で妊娠がはっきりした時は『やっぱりできてたか』と言葉では言い表せない気持ちだった」と話す . |

**表 3 「望まない妊娠」に戸惑っている場面（3 件）**

| 妊娠週数 | つわりなどの状況 | 妊婦の反応 |
|---|---|---|
| 妊娠 6 週 | つわりで身体がだるい、イライラするなどいっている . | 「つわりがひどいことが多く、そのうえ禁酒・禁煙や仕事のストレスなどもたまっていたのにそれを発散する方法がない。夫だけ遊んでばかりとイライラすることが多かった」という。 |
| 妊娠 12 週 | 妊娠 6 週よりもさらにつわり症状がひどくなる。 | 「さらにつわりがひどくなって毎日のように怒っていた。妊娠していなければ自分も遊べるし、夫だけ遊んでいるなど思わなかっただろうけど」という。 |
| 妊娠 14 週 | 実母に「つわりは気の持ちよう、だらだらしていてはいけない」といわれる。 | 無表情に軽くうなずくだけだった。 |

**表 4　夫が妊娠や子どもが生まれることを喜んでいる場面（3 件）**

| 妊娠週数 | 夫の声かけ・行動 | 妊婦の反応 |
|---|---|---|
| 妊娠 5 週頃 | 夫は以前から子どもがほしいといっていた。 | 「前から夫は子どもをほしがっていたことを考えて、産もうと思った」といっていた。 |
| 妊娠 22 週 | 毎晩胎児に話しかけている。名前をつけて呼んでいる。男児と知りキャッチボールができると喜んでいる . | 嬉しそうに話し、以前に比べ、楽しそうに笑顔である。「名前は二人で考えた」と話していた。 |
| 妊娠 37 週 | 立会い分娩を希望している | 「どちらでもいいがいてくれたほうがいいのかなと思う」と話す。 |

**表 5　夫が子育てや育児に協力の意志を示している場面（1 件）**

| 妊娠週数 | 夫の声かけ・行動 | 妊婦の反応 |
|---|---|---|
| 妊娠 30 週 | 家事・育児は協力して行っていこうといってくれる。遅く帰ると食事を作って待っていてくれる。 | 仕事を続けていくことに結婚前から賛成してくれていると話す。 |

**表 6　夫が妊婦に対して身体に関する注意を示した場面（1 件）**

| 妊娠週数 | 夫の声かけ・行動 | 妊婦の反応 |
|---|---|---|
| 妊娠 5 週前 | 妊娠かどうか分かるまではタバコやお酒はやめておいたほうがいいと話す。 | タバコもお酒もやめることにした。 |

**表 7　胎児の存在の認知（2 件）**

| 妊娠週数 | 超音波検査などの状況 | 妊婦の反応 |
|---|---|---|
| 妊娠 9 週 | 検診時にエコーで胎児を見せてもらい、動いているのが分かった。 | 「『おお！』と感動した」と話す。 |
| 妊娠 18 週 | 初めて胎動を感じた。 | 「『これが胎動か』と感動した。本当にいるんだと感じた」と話す。 |

**表 8　妊娠高血圧症候群と診断されたとき（2 件）**

| 妊娠週数 | 妊娠高血圧症候群と診断 | 妊婦の反応 |
|---|---|---|
| 妊娠 36 週 | 妊娠高血圧症候群と診断、説明を受け、総合病院を紹介された。 | 「自覚症状がないから嘘と思った。出産すれば治るらしいから早く無事に産まれてきてほしい」と話す。 |
| 妊娠 37 週 | 入院となる | 「最初は嫌だったけど、赤ちゃんと自分のために仕方ないと思った」と話す。 |

## Ⅵ. 考察

### 1.「望んでいない妊娠」の意味と「望んでいない妊娠」である妊婦への理解

この事例において，妊娠を望んでいない気持ちが強く表れているのは初診時前，すなわち，妊娠診断がされておらず，「妊娠しているかもしれない」と思っているときと妊娠と診断された直後の２場面である．しかし，妊婦は望んでいない妊娠であることを話しながらも夫や会社の先輩の言葉を気にして，煙草もお酒もやめようとしている．また妊娠診断直後にも「言葉では言い表せない気持ち」をもって「やっぱりできてたか」とつぶやいているということは妊娠に対する戸惑いであって否定ではないと考えられる．これらのことから，「望んでいない妊娠」は必ずしも妊娠したことの否定ではないといえる．この妊婦の場合は，やりがいを感じている現在の仕事が児の出生によって妨げられては困るという思いから出た言葉だったのである．つまり「望まない妊娠」というより「予期していなかった妊娠」に対する戸惑いや母となることよりも職業人としての意識が強いと考えられる．成田（1993）は「計画的な妊娠であることと妊娠の受容とは関係がない」（成田ら，1993）と述べている．だから妊娠に対する気持ちがたとえ否定的，または予期しない妊娠への戸惑いがあったとしても，その妊娠経過の中で妊娠を受容し，母性意識が芽生え育っていく可能性は十分あるということである．では看護職は「望んでいない」とみえる妊娠をした妊婦をどのように受けとめたらよいのだろうか．今回の事例において，つわり症状が妊娠への戸惑いを大きくさせている．すなわち，妊婦に身体的苦痛があり，胎児に関心を向ける心理的余裕がないときも「妊娠を望んでいない」とみえることになる．そして望まない妊娠であるという負担感はつわり症状をより強くすることも考えられる．とすると，「望まない妊娠」であると思われる妊婦に対して，少しでも早く妊娠が受容できる，あるいは妊娠を望んでいないことで自己を責めることのないように関わっていくことが看護者には必要になる．看護者は妊娠を心から受けとめられないことが全ての妊婦にあり得ることを十分に理解すると同時に，なぜ妊娠を望まないのか，妊娠そのものの否定か，今という時期に妊娠を望んでいないかを区別できねばならないし，また，今妊娠を望めない理由の存在を十分理解し，それを否定せずに見守るという姿勢が大切になるように思われる．新道（1990）は「妊娠の喜びとともに当惑や不安を感じているアンビバレンスな状態にある」（新道ら，1990）という．そのことを知って妊婦の思いに添いながら妊娠経過をみていくことが大切である．

### 2. 妊婦が妊娠受容にゆれることの意味

妊娠と診断された時に妊婦は「やっぱりできてたか」と当惑する気持ちを示す一方，煙草やお酒をやめるというように妊娠しているという自覚をもっている．大日向（1987）は「当初の妊娠に対する姿勢がその後の妊娠過程における心理を左右することを明らかにしたといえるが，しかし当初の気持ちは必ずしも不変ではなく，妊娠の進展とともに妊娠や母となることへの受容を変えていくことが見出されている」（大日向，1987）といい，また「当初は妊娠に対して否定的な姿勢で臨んでいても，それが自分自身の生活に大きな影響を及ぼすという認識から生じた葛藤であった場合は，その葛藤を乗り越えて母親としての自己を受容する心理発達が認められる」（大日向，1987）としている．人として生きる中でもさまざまな葛藤の中で生きている．その葛藤を乗り越える過程が生きるうえで大きな意味をもつといえる．この事例において妊娠と仕事継続の希望との選択決定上の葛藤があった．つまり戸惑う気持ちが強いからといって，「母親になる」ということの否定ではなく，妊娠することで種々制約されることになり，生活を変更せざるを得ないのだということを自分自身のこととして理解しているからこそ，戸惑う気持ちが強かったのだろう．「女性として社会で生きる」と「母親として生きる」との選択の迷いだった．また大日向（1988）は「妊娠を受容する姿勢として問題とすべきことは，母親になることが単に嬉しいか嫌かではなく，それをどこまで自分自身の問題として自らに問う姿勢があるかが重要である」（大日向，1988）と述べている．とすると葛藤することは，自己と向き合って苦しんでいるときと解釈できる．だから看護者は「一体何が妊娠の受容を妨げているのか」を知り，「この妊婦は妊娠をどのようにとらえているか」を考えて妊婦に接することも大切だと考えられる．

### 3. 妊娠過程における妊娠の受容と母性意識が育つことへの影響因子

この妊婦の場合葛藤を乗り越え，母性意識の成長・妊娠を受けとめることができたのはなぜだろうか．妊娠の受容と母性意識の育成に影響する因子は何かをこの事例を通して明らかにすることができた．結果に示したように①夫の行動・言葉かけの持つ意味，②超音波や胎動による胎児の存在の実感，③妊娠高血圧症候群と診断されたことが妊婦の心理に大きく影響していることは明らかである．そこでこの３点についてその影響を考えてみた．

1）夫の行動・言葉かけの持つ意味

大日向 (1988) は「子どもが生まれることに対する夫の喜びや期待，そして夫の期待にこたえようとする妻としての心の働きは，女性が妊娠を肯定的に受容するうえ

で重要な要因と考えられる」(大日向, 1988) といっている．今回の事例の場合，まず出産すると決めたひとつの要因が「夫が子どもをほしがっていた」ということだった．また「夫は毎晩胎児に話しかけている」と楽しそうに笑顔で話している場面もあった．夫が胎児に話しかけたりする行動が，妊婦は「夫が喜んでいる，楽しみにしている」と感じ，それを見て妊婦も喜びを感じている．成田 (1993) は「夫の妊娠の受けとめが肯定的であるほうが妊婦の胎児への愛着が高いことが明らかになっている」(成田, 1993) と述べている．これにより妊婦の気持ちが安定して胎児に関心を向ける余裕が生まれ，胎児への愛着を高める方向に影響する．夫の存在，夫の行動などは，妊婦の妊娠や胎児に対する思いに影響を及ぼすということがこの事例でもいえる．今回の事例では夫が胎児への関心以外に，働いている妊婦に対する理解・家事などの援助を行っているようであり，こういった具体的な援助は仕事にやりがいを感じ，仕事を継続していきたいという希望がある妊婦にとっては，妊娠を受容し，母として，職業人として生きようとするうえで大きな支援になったと考えられる．

2) 超音波や胎動による胎児の存在の実感

成田 (1993) は「妊娠週数と愛着の間には有意な正の相関が認められた」と述べており，また「胎動を感じることが愛着を高める方向へ影響している」(成田, 1993) といわれている．この事例でも妊娠 9 週頃エコーで胎児の動きをみて感動した場面，妊娠 18 週頃初めて胎動を感じた場面など胎児の存在を認知したとき，成田 (1993) のいうように胎児への愛着を高める方向に向いている．胎児の存在を感じるということは，母親としての自覚をよりはっきり感じているといえる．母親としての自覚を感じることは，母性意識を高める方向に働き，妊娠を肯定的に受け入れる方向につながっている．望まない妊娠であっても，胎動などにより「感動した」という思いは，望んだ妊娠であったときと変わるところはない．「望まない妊娠」であっても胎児の存在を認知することは，母性意識や妊娠の受容する方向に影響を及ぼすといえる．

3) 妊娠高血圧症候群と診断されたことが妊婦の心理に与えたもの

妊娠後期に妊娠高血圧症候群と診断され，妊娠高血圧症候群という自覚がないことや知識があまりなかったことから「病気」だと強く感じることはないが，わからないことがある分不安もあり，複雑な心理状態であると考えられる．妊娠高血圧症候群と診断され，妊婦は「自分の生活がいけなかったのか」など反省と後悔している場面もみられるが，同時に「無事に生まれてきてほしい」という言葉から胎児を心配する感情もみられる．ここでは身体的変化や入院などがあったにもかかわらず，胎児への関心，胎児を慈しむ言葉が変わらずにみられる．つまり妊娠したことを後悔している様子はない．妊娠高血圧症候群と診断されたことは，妊婦の妊娠に対する感情にマイナスの影響は与えていないと判断できる．このときには「赤ちゃんは大丈夫なのか」という母親としての責任，自覚がはっきりとしていて，問題に対する対処能力が高まってきている．花沢 (1992) は「妊娠・出産時の苦痛や不安を適度に体験した母親に母性意識の高まる傾向が見出された」(花沢, 1992) といっており，この事例でも苦痛などを経験し，それを乗り越えることで，母性意識が高まってきたと考えられる．つまり，妊娠高血圧症候群と診断されたことは，妊婦に不安などを与えたというだけではなく，母親としての自覚，責任をより強く感じさせるきっかけにもなったとも考えられる．

**4.「望んでいない妊娠」と思われる妊婦への看護職としてのかかわり**

1) 母性意識が育つことを信じて待つ

母性意識が育つために重要なことは，望んだ妊娠か望まない妊娠かではなく，妊娠期間を通して，妊婦の心理に影響を与えるものが重要な因子になってくると考えられる．この事例でも，最初は「望まない妊娠」であるように思われたが，禁酒・禁煙を行うなど，本当に望んでいなかったのではなく，「予期しなかった妊娠」であり，予期していなかったゆえの戸惑いであると考える．また，つわりの時期の身体的苦痛が妊娠の受容を妨げてはいるが，夫が子どもをほしがっていたことや胎児に話しかける行動，超音波や胎動といった胎児の存在の実感が妊娠の受容を肯定的にし，母性意識の成長に影響したといえる．野田 (1995) は「『望まない妊娠』でも妊娠中では『生まれてくる子のことが楽しみである』，出産後では『子供を産んでよかったと思う』の質問に対して肯定的であり，『望まない妊娠』が必ずしも『望まない子ども』に結びつくことではないことが推測される」(野田, 1995) といっている．よって，看護者は望まない妊娠であっても「出産する」と決めた妊婦に対して，なぜ望まない妊娠であるのかを理解する努力が必要であり，妊娠期間中の妊婦の心理状態をよくみていくことが重要であると考えられる．妊婦にとって身体的・心理的にストレスとなるような苦痛，悩みに対する援助は必要だが，苦痛，悩みが存在することが妊婦の母性意識の成長にマイナスになるのではなく，その苦痛や悩みを乗り越えることが母性意識の成長につながるのである．看護者はその苦痛や悩みを乗り越えられるように援助することが必要である．

2) 母性意識の高まりのチャンスの活かし方

超音波で胎児が動く映像を見ることや，胎動を感じることは妊婦が胎児に関心を向けるきっかけになってい

る．こうしたときに看護者が妊婦に対して「よく動いていますね」「大きくなってきましたね」などの声かけを行うことにより，より胎児に関心が向けられ，母性意識の高まりにつながるのではないか．看護者は妊婦が胎児に関心を向ける機会をつかみ，その関心をより高めていく方向に声かけや，援助を行っていくことが母性意識の高まりにつなげていく援助になると考えられる．

3) 夫への働きかけ

今まで述べてきたように，妊婦にとって夫の存在は非常に重要であると考えられる．夫の胎児に対する態度は妊婦の胎児に対する態度にも影響する．夫自身の妊娠に対する受けとめがどうであるのかということを知っておく必要があり，看護者は夫に対し，妊婦にとって夫の存在が自覚できる，また夫自身の支援としても外来に訪れた夫に積極的に声かけなどを行っていくことも大切だと考えられる．

## Ⅶ．結論

1．妊娠に対する戸惑いの気持ちが強く表れていたことで「望まない妊娠」にみえていた．
2．つわりなどの身体的苦痛がさらに妊娠に対する戸惑いの気持ちを強くしていた．
3．夫の妊娠や胎児に対する肯定的な態度や行動，胎児の存在を実感することは，妊娠を肯定する影響因子であった．

## 謝　辞

今回この研究に協力してくださったＮさん，および本研究にあたりご指導下さいました埼玉医科大学保健医療学部看護学科岡部惠子教授に深く感謝いたします．

なお，本稿は滋賀医科大学医学部看護学科の看護学分野の卒業論文に加筆修正したものである．

## 文　献

花沢成一 (1992): 母性心理学 , 医学書院 , 東京.

野田順子 (1995): 妊娠中及び出産後の女性を対象とした望まない妊娠に関する調査 , 厚生省心身障害研究望まない妊娠等の防止に関する研究 , 平成 7 年度報告書

成田伸 , 前原澄子 (1993): 母親の胎児への愛着形成に関する研究 , 日本看護科学会誌 , **13**(2), 1-9.

大日向雅美 (1987): 母性性の発達 妊産婦の心の動きを中心として , 助産婦雑誌 , **41**(12), 1004-1011.

大日向雅美 (1988): 母性の研究 , 川島書店 , 東京.

新道幸恵 , 和田サヨ子 (1990): 母性の心理社会的側面と看護ケア , 医学書院 , 東京.